

## 日本と中国の若者の言語使用に見られる対人関係上の志向性：「卑語」、「ぼかし表現」、「アクセサリー化した方言」の使用実態を中心に

王, 丹丹

<https://doi.org/10.15017/1543915>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

論文審査の結果の要旨及びその担当者

ふりがな 氏名	杓 知 知 王 丹 丹
論文名	日本と中国の若者の言語使用に見られる対人関係上の志向性 —「卑語」、「ぼかし表現」、「アクセサリー化した方言」の使用実態を中心に—
論文審査の結果 の要旨	別紙のとおり
論文調査委員	別紙のとおり
試験又は学力確 認の結果の要旨	王丹丹の博士論文公開審査は、2015年6月12日（金）16時より18時まで、九州大学伊都キャンパス比文言文棟320教室において行われた。最初に申請者が博士論文の概要を説明し、続いて論文の内容について、各調査委員と申請者の間で順に質疑応答が行われた。申請者は、調査委員の様々な観点からの質問に対して、一つ一つの確に答えた。公開審査終了後、論文の内容および公開審査での質疑応答について調査委員で合議し、その結果、申請者が博士（比較社会文化）の学位を授与されるに十分な学力を有すると判断した。
論文審査学府教 授会等の名称と 組織	名 称 九州大学大学院比較社会文化学府教授会  組 織 委員 65名 （当日の組織委員 54名）
判定方法	大学院比較社会文化学府教授会における無記名投票による。  出席者 45名 可票 44票, 否票 0票, 白票 1票

氏名	王丹丹			
論文名	日本と中国の若者の言語使用に見られる対人関係上の志向性 —「卑語」、「ぼかし表現」、「アクセサリー化した方言」の使用実態を中心に—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松村 瑞子
	副査	九州大学	教授	山村 ひろみ
	副査	九州大学	教授	松永 典子
	副査	九州大学	准教授	秋吉 収
	副査	九州大学	准教授	西山 猛

## 論文審査の結果の要旨

近年「若者言葉」についての研究が数多く行われてきたが（井上 1988；米川 1997 等）、それらの研究の大部分は若者により創られた新しい語彙を中心とした研究であり、卑語、ぼかし表現、フィルター等、語彙論や意味論では注目されにくいコミュニケーションにおいては重要な役割を果たしている表現や用法に関する研究は未だ数少ない。その意味で、本論文は「卑語」「ぼかし表現」「方言」の用法を中心に、自ら収集した日中両言語の実際の会話とウェブ上のコメントをデータとし、両国の若者の言語使用に見られる対人関係上の志向性の相違を明らかにした先駆的研究であり、高く評価することができる。

本研究は 8 章からなる。

第 1 章～第 3 章では本研究の目的、先行研究、会話データと研究方法について述べた。

第 4 章は日中両言語の卑語使用の分析である。まず、卑語使用を世代差と性差に分けて分析した。その結果、世代差については日中両国ともに若い世代が卑語を多用するという結果になった。性差については、日本語では男女差が見られなかったが中国語では男女差がはっきりと存在していた。この相違は、日本語では性に関わる卑語の使用が限定されているが、中国語では通常の会話でも多く使用されていることから生じることが分かった。最後に、実際の会話例の分析を通して、日中両言語における指示詞の卑語化という共通点を見出した。

第 5 章は「ぼかし表現」の使用実態の分析である。日本語を分析した結果、若者が使用する「ぼかし表現」の数は他世代より圧倒的に多く、形式も豊富であること、また女性は男性よりかなり高い頻度で使用していることが明らかになった。また、婉曲表現とされる「ぼかし表現」は、若者においては集団であることを強調する機能をもつことが分かった。このような親しい若者同士の間の「ぼかし表現」の使用は、従来言われてきた「摩擦の回避」より、「親密さを出す」という解釈のほうが妥当であると考えられる。「ぼかし表現」が若者に好まれるのは、相手への親密さを示しながら、相手の領域に踏み込まない姿勢も含ませることのできる言語表現であるためであると考えられる。次に、日本語の「ぼかし表現」に対応する中国語表現について分析を行った。分析の結果、中国語の場合は日本語と同様の「ぼかし表現」の機能は発達していないこと、さらに若い世代では「強調」「言い切り」という機能を発達させていることが明らかになった。

第 6 章では、ウェブ上のコメントで使用する方言について調査した。福岡出身の若者がインターネット上でコメントする際には、地元方言をベースとしながら、場の雰囲気、気持ちを考慮する場合には他地域の方言を使用するという傾向が見られた。特に、同じ 20 代の若者であっても、仕事

をしているかどうかによって、方言を使い分けていることが明らかになった。つまり、話し手は自分が属する集団によって方言を選択しているのである。一方、中国の若者がコメントをする際には、標準語をベースとして、他地域方言を多く使用している。以上のような日本と中国の方言使用の差異が生じるのは、日本の若者は集団意識が強く、コメントする際に相手と同じ集団であることを地元方言で示す傾向が強いが、中国の若者は個人意識が強く、自己表出のため、あるいは自分のコメントに注目させたいという意識で他地域方言を多用しているためであると考えられる。

第7章では、6章までの議論を踏まえ、日本語と中国語の「卑語」「ぼかし表現」「方言」の用法に関して考察を行った。日本の若者は、親しい間柄の友達同士の会話でも、攻撃性の低い卑語を使用したり、ぼかし表現を使用したり、方言を使用することで、相手への親密さを示しながらも、相手との距離を保っているということが分かった。一方中国の若者の場合は、親しい相手との会話では自分の感情、評価、見解を明確に表明することが重要であり、そのために攻撃性の高い卑語を多用したり、語気を強めたり、方言を使用することで、相手の注意をひいて自分の意思を認めてもらおうとする傾向があることが分かった。

第8章は本研究の内容をまとめた上で、今後の課題を述べた。

本研究の意義は、自ら収集し、丹念に文字化した実際の会話およびウェブ上のコメントをデータとして、「卑語」「ぼかし表現」「方言」の談話中での用法を詳細に分析し、日本と中国の若者の対人関係上の志向性を究明した点にある。本研究のような言語使用の日中対照分析は、日本人と中国人が、より深くお互いの文化を理解し、異文化コミュニケーションを促進することに繋がると期待される。